

[002] 語文研究表紙奥付等

<http://hdl.handle.net/2324/10265>

出版情報：語文研究. 2, 1955-05-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



学会 彙 報

行 事

昭和二十六年 度

○新入会員歓迎会（昭和二十六年五月十二日）於法文第一演習室。

○総 会（五月二十日）於三長閣。

○研究発表題目及び発表者

伊勢物語燈について 目加田さくを

我が妻はいたく古比らし 東 秀 吉

―万葉集に於けるラシの接続―

上代接頭語の表現形態とその本質 瀬良 益夫

遁世者の自然観について 井手 恒雄

詞・辞の過程的構造形式図について 黒岩 駒男

文学表現に於ける幻影と象徴 藤井 毅

文学史の可能性について 笹淵 友一

蕨玖波集の自然 瀬古 確

²³⁴ 焼津辺―ヤキツベニカヲカ― 穴山 孝道

○例会（十一月二十五日）於法文第一演

習室。

研究発表題目及び発表者

上代歌謡における助詞「や」と「か」

（卒論） 野田 幸助

兼好の文芸の反封建性について

井手 恒雄

合作浄瑠璃の作者文耕堂を中心として

横山 正

俳諧研究の現状と将来 杉浦正一郎

古代日本語における言語基層の問題 福田 良輔

○笹淵先生歓迎座談会（昭和二十七年一月十四日）於法文五番教室

○卒業論文発表会（二月三日）於三長閣

近代リアリズムの変質について

林 敬之助

純粋小説論 田村 克郎

宮本百合子論 木原 民也

徳田秋声論 野上 一男

萩原朔太郎論 工藤 正介

嘉村磯多論 雨宮 崇

日田蕉門の研究 大内 初夫

―蕉風地方滲透の一考察として―

竹取物語の背景 村田 正志

―説話の推移過程を主題として―

なほ引続いて同所に於いて予餞会が催された。

昭和二十七年 度

○新入会員歓迎会（四月二十一日）於法文第一演習室。

○総 会（五月十一日）於法文第七演習室

○研究発表題目及び発表者

明治文学とニーチェ 重松 泰雄

抒情物としての万葉植物 永井 寛

源氏物語構想論の構想 目加田さくを

―辞による― 東 秀吉

操り漸衰期の浄瑠璃作者 横山 正

文学評論に於ける封建性について 井手 恒雄

真福寺本靈異記の性格 平井 秀文

○笹淵先生歓迎茶話会（九月十八日）於三長閣。

○例会（十一月二十三日）於法文第七演

習室。

○研究発表題目及び発表者

俳人野坡の九州行脚について 大内 初夫

古代形容詞の語尾「ケ」について 麻生 朝道

浪華日記の作者
—宝曆末期の一戯作者—
清田 正喜

少将滋幹の母論
目加田さくを

徒然草の一解釈
井手 恒雄

万葉より古今への道
白木 喬

講演
文学における「観念」の問題
笹淵友一 講師

なほ同日夜、笹淵先生歓迎懇親会が九大
職員寮に於いて行はれた。

○卒業論文発表会（昭和二十八年二月一
日）於法文第七演習室。

長塚節の「写生」について
坂本 一美

西行をめぐる三つの考察
木下 毅

西鶴の非感傷性と云はれるもの
—特に後期の作品について—
芦塚 民歌

宮沢賢治論
—「象徴」への表現について—
境 忠一

明治新体詩論の展開
武田 昭雄

近松作品の語彙的研究
棚町 知弥

—「心中天の網島」を中心に—
用字法より見たる万葉集仮字書の卷
鶴 久

上代助詞「を」について
佐々木義昭

芭蕉・蕪村
—座五に関する一考察—
我有 武夫

副詞の陳述性について
佐田 智明

北条民雄研究
坂本 妙子

純粹小説論
田村 克郎

なほ引続いて予餞会が三畏閣に於いて行
はれた。

昭和二十八年年度
○新入会員歓迎遠足会（五月十七日）今宿
行き。

○総 会（五月三十一日）於法文第七演習
室。

研究発表題目及び発表者
「旅寝論」と「去来抄」
大内 初夫

「伸子」の抵抗
春山 要子

荷風の戯作者性について
立川昭二郎

人麻呂をめぐる
山田 輝彦

「渡津海の豊旗雲に」の歌について
永井 寛

源氏物語に於ける古物語性
—「宇治十帖」について—
目加田さくを

国語の二三について
井浦 安喜

引き続き同日夜、三畏閣に於いて懇親会
が催された。

○例 会（六月二十七日）於法文第七演習
室。

研究発表題目及び発表者
和泉式部について
藤崎 英子

「もの」考
徳満 澄雄

荷風文学の二重性について
立川昭二郎

○小島先生歓迎座談会（九月二十六日）於
法文第六演習室。

○例 会（十一月十九日）於法文第七演習
室。

研究発表題目及び発表者
去来展に於ける新資料の二・三について
大内 初夫

憶良の思想をめぐる
柴田 守

序詞に於ける人麻呂の特色
岡本 庸子

○卒業論文発表会（昭和二十九年二月七
日）於三畏閣。

山上憶良研究
柴田 守

大伴家持研究
藤井 茂利

人麻呂長歌の修辞研究
岡本 庸子

告白文学としての蜻蛉日記
田崎 正大

源氏物語に於ける主題の展開

和泉式部の研究 徳満 澄雄
 中世文学の一側面 藤崎 英子
 芭蕉と自然 佐々木雄爾
 西鶴町人物の社会的背景 森山 隆
 なほ引続き同所で卒業生予餞会が行はれた。

昭和二十九年
 ○新入会員歓迎遠足会(五月二十五日) 志賀島行き。大学院修士課程二人、学部十四人の新入生を迎へたが、西鉄ストと雨模様の天気災されて、福田・杉浦両先生を合せて十人に満たない参加者であつた。

○総会(五月二日)於法文一番教室。
 研究発表題目及び発表者
 「見るからに」考 東 秀吉
 打消の助動詞の系譜 矢野 文博
 「ヤン」について
 兼好法師家集に見える兼好

大内 騷 耶子
 白木 喬
 藤井 毅
 瀬古 確
 橋本元二郎
 荷田多満の万葉集研究
 日本永代蔵考
 七五調の成立に就いて
 蜻蛉日記の一節について

なほ同日夜、市内「魚よし」に春日政治先生の喜寿記念祝賀の宴が催され、春日先生御夫妻、令息和男先生を御賓客とし、大阪の小島吉雄先生、九大国語国文の諸先生、東京の笹淵先輩をはじめ、先生に教へをいただいた諸先輩や先生の学徳を慕ふ卒業生が福岡はもとより近畿・中国・九州の各地から出席し、和やかな賀宴が催された。

○小島先生歓迎座談会(五月十二日)於三畏閣。
 福田・杉浦両先生の外、中国文学の目加田教授も出席され、活氣旺盛した座談会であつた。

○例会(六月二十六日)於法文第七演習室。
 研究発表題目及び発表者
 井堤越す浪の音のさやけさ 鶴 久
 貞門談林時代の九州俳壇 大内 初夫
 林芙美子の「放浪記」について
 立川昭二郎

○関西方面研究旅行(十月十九日-同月二十三日)
 春日和男先生引率のもとに、鶴助手外大学院・学部学生十四名は、関西方面に万葉古蹟歴訪を中心とした四泊五日の研究旅行を

行つた。沢瀉久孝博士・大阪大学の小島吉雄・犬養孝両先生、八木毅先輩に、御多用中にも係はず、案内や宿泊等何かと御親切に御世話していただいたことは感謝に堪へない。

○新入会員歓迎遠足会(十一月十四日)深江行き。
 教養部よりの進学生十四名を迎へ、福田・杉浦・春日の諸先生をはじめ在学生の大部分が出席し、休憩所で懇親会が催された。

○例会(十二月四日)於一番教室
 研究発表題目及び発表者
 輝く日の宮の巻について 徳満 澄雄
 あゆみ抄に於ける「かへしざま」について 佐田 智明
 源氏物語に於ける助動詞「めり」について 伊藤伊勢男
 ○卒業論文発表会(昭和三十年一月三十日)於法文第七演習室。

学 部
 宮沢賢治研究 野口 親光
 一法華経とその生涯
 竹取物語管見 高山 定基
 清少納言枕草子の特質の所在
 一をかしの文学としての枕草子
 高木 宏

伊勢物語と貫之 末永喜美枝

大学院

あゆみ抄の研究 佐田 智明

―主として文法思想と
その成立過程について―

引続き三畏閣で卒業予餞会が催され、学

部の福田・杉浦・春日及び教養部の田村・重

松の諸先生をはじめ、福岡近在の諸先輩、在

学生の大部分が出席し、和やかな中にも、

大学生の予餞会に相応しい活気を呈した会

であつた。

本年度講義題目

第一学期（自昭和二十九年四月至同年

十月）

国語史

演習 江戸時代古典学者の語法研究（大

学院のみ）

演習 万葉集卷五

平安朝音韻の諸問題

国文体発達史

演習 芭蕉の連句

演習 西鶴の小説

演習 枕草子

特講 日本文学に於ける仏教思想

（分校）穴山助教

第二学期（自昭和二十九年十一月至同

三十年三月）

国語史

演習 万葉集卷五

平安朝音韻の諸問題（其の二）

演習 土佐日記

国文体発達史

日本近世文学史（芭蕉の作品）

演習 芭蕉の連句

演習 西鶴の小説

講読 堤中納言物語

演習 枕草子

特講 日本文学に於ける仏教思想

（分校）穴山助教

江戸時代の古典学者の語法研究（大学院

のみ）

特研 あゆみ抄（大学院のみ）

特研 芭蕉書簡の研究（大学院のみ）

異動・消息

○杉浦正一郎先生は昭和二十八年八月十六

日付を以て本学教授になられました。

○春日和男先生は昭和二十九年七月一日付

を以て教養部助教より文学部助教に配

置転換にられました。

○重松泰雄氏は昭和二十九年七月十五日付

を以て、本学教養部第二分校講師になられ

ました。

○鶴久氏は昭和二十八年五月十日付を以て

本学助手に就任されました。

○名譽会長春日政治先生は昭和二十九年四

月一日を以て喜寿の齢を迎へられました。

心からお慶び申し上げます。

○笹月清美氏は昭和二十九年二月四日逝去

されたので、福田先生が本会を代表して葬

儀に参列されました。深く哀悼の意を表

します。

○高木正蔵氏は昭和二十九年六月三日逝去

されたので福田先生が本会を代表して葬儀

に参列されました。深く哀悼の意を表し

ます。

○春日政治先生から、この度「語文研究」

の基金として金一万円を御寄贈いただきま

した。會員諸氏に報告するとともに、先生

に厚く御礼申し上げます。

（以上）